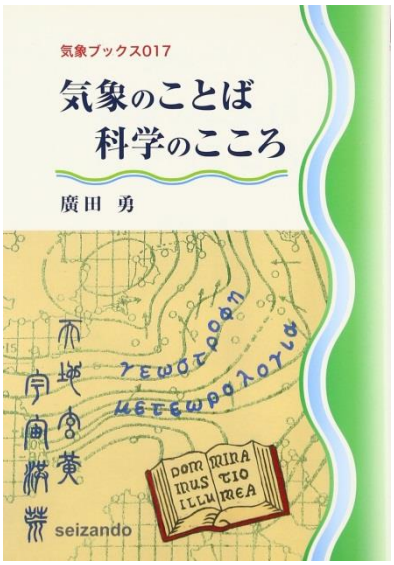
廣田　勇著『気象のことば 科学のこころ』



山の本ではないし、近刊でもないのでここで紹介するのも気が引けるが、ナルホドなるほどと眼から鱗の本なので一読をお薦めしたい。

書かれているトピックスが気象や科学に例をとったものなので、最初は専門用語などに少し戸惑われるかも知れないが、登山をする方は多かれ少なかれ天気や気象や自然に興味をお持ちと思うので、左程の違和感は無いと思う。叢書名が気象ブックスとあるから、専門書と思われるかもしれないが、書かれているトピックスは我々の日常生活のどこにでも転がっていることなので、寝ころんで読んで下さい。

さて、前置きが少し長くなった。この本は全編“我田引水”で出来ている。誤解の無いようにお願いしたいが、“我田引水”と言っても隣の田圃から栄養分に満ちた水だけを我が田に盗み込むということではなく、その辺の川に沢山流れている有象無象や魑魅魍魎、また、稲に有害な毒物や汚染物質なども清濁併せて引き込んだ水の中から気象に関するネタを引き出して身近な日常の事象に被せて、俎の鯉よろしく世相を一刀両断に切って見せてくれるのであるから、眼から鱗、その刀の切れ味に惚れぼれとしてくるのである。

一刀両断に切られているのは近年の世相の乱れ、例えばインターネット（著者の言葉では“電気情報検索装置”）によって欲しい情報が“欲しい解”の形で即座に安直に入手できることから、モノを考えるという習慣が無くなってしまっていること、またこのことと関連するが、返す刀で国民の最も基本的な文化である国語が乱れてしまって、紀貫之の古今和歌集の頃から培われてきた我々日本人の文化「言の葉の力」が失われてしまっていることなどであろう。

この本に通底する基調は、「なにごとによらず、自分の目で物事をみつめ、自分の頭で考えること」であり、大袈裟に言えば「自分の哲学を持つこと」である。哲学などといえば大袈裟であるが、哲学の本来の意味は、ギリシャ語で「考えること（sophy）が好き（phil）」という極めて単純で分かり易いものだった筈であると著者は言う。例えば、身近な天候や動植物、夜空の星などのような自然を相手として、まずはその面白さを感じ取り、自分で納得するよろこびを体験することこそが科学の原点だそうだ。

本書は、このような立場から硬軟織り交ぜて書かれた科学随筆集であるが、その及ぶ範囲は科学のみならず、社会時評にまで及んでいる。どちらかというと、社会時評の方がメインの感が強い。

またまた前書が長くなってしまったが、本書の内容に少しだけ触れておこう。

第１部「気象のことば」。気象専門用語の解説ではなく、馴染みの多い日常の言葉を手掛かりにして観天望気などの気象の世界を見つめる楽しみが述べられている。第２部は「我田引水」、主に最近の乱れた言葉づかいやIT用語などの全く日本語の態をなしていないカタカナ用語が俎上に挙げられている（ダウンロード、フォントなど）。IT用語に限らず、外国産の言葉を日本語に翻訳する時の難しさや、それ故に思慮熟考の上でちゃんとした訳語を作らねばならないことが力説されている。例えば、秀作の例として、tele・phone⇒「遠･音」ではなく「電話」が挙げられているのは興味深い。第３部は「科学のこころ」で、科学研究のあるべき姿が身近な例を引いて述べられているが、ナルホドと納得させられた。

気象や科学を題材にはしているが、その殆どは狂った世相や乱れた日本語への警鐘でもあろう。

著者は著名な気象学者であるが、日本文化やことばの世界にも造詣が深い。

成山堂書店　気象ブックス 017　　平成 19 年 5 月刊　1,600 円　　（酎、2018 年 7 月記）